

【研修報告】

## 質的研究への取り組み

—第7回質的研究国際学術集会（QHR 2001）に参加して—

中 信 利恵子\*

### はじめに

平成13年6月26日(木)から6月29日(日)まで、韓国、ソウル市において、第7回質的研究国際学術集会2001（QHR:Qualitative Health Research Conference 2001）が開催された。IIQM（International Institute For Qualitative Methodology）の主催で、梨花女子大学看護科学部（College of Nursing Science Ewha Womans University）の協力で開催された。この大会には、質的研究に関心を持つ様々な保健医療分野の従事者、主に看護職を中心に、医師、ソーシャルワーカー、心理学者、社会学者、文化人類学者などが参加していた。世界20カ国から約150名、韓国国内からの参加者、そして梨花女子大学の学部生や大学院生がスタッフとして参加していた。

質的研究に焦点を当てた学術集会は、日本ではまだない。本大会は、アジア初の質的研究に関する国際学会であった。国際学会への参加は今回が初めてであり、質的研究に焦点を絞った大会であったので、国際的にどのような活動がされているのか、自分の目で確かめたいという期待を持って参加した。

### 学術集会の概要

本大会では、口演やポスターセッションなどの各参加者のプレゼンテーション以外に、基調講演9題、シンポジウム1題、ワークショップ3題が開催された。口演は198題、ポスターセッションは55題で、病、慢性疾患、質的研究方法、現象学、グラウンデッドセオリー、哲学、教育、ヘルスケア、ケアリング、体験、病の体験、苦悩、生きられた体験、身体、QOL、教育、トラウマ、家族ケアなどの多岐に渡るテーマがあげられていた。口演発表は、小さな教室で、参加者全員が顔を合わせながら行う発表であっ

た。マイクもなく、演者を中心に和やかな雰囲気の中で、熱心な討議がされていた。発表も個性が出ており、慣れた演者は、ほとんど原稿を見ず、参加者に語りかけるように演じ、言葉の分からない部分も身体から表現する熱意に引き込まれる思いだった。自分の研究の成果をいかに他者に伝えるか、このことも大変重要な課題であると感じた。

### 質的研究の重要性

本大会で、特に印象に残った基調講演は、Kyung Rim Shin 会長（梨花女子大学教授）が「更年期女性の生きられた身体変化の体験（The Lived Changing Experience of Woman's Body）」と題して、現象学的方法での研究成果を発表したものである。韓国の画家のイラストをスライドで示しながらの講演は、とても興味深いものであった。その人の社会文化的な背景への深い理解の必要性を、そして、手術などのうわべの変化だけではなく、その人の本質的な変化をも理解すること、全人的な（holistic）看護を行っていくこと、質的研究の必要性を述べていた。さらに、東洋的な思考や韓国文化に基づいた看護を発展させていくとき、質的研究が重要であることを主張した。このことは、同じ東洋である日本においても、その文化的背景に根ざした看護を考えるという意味で、示唆を与えられる。Shin 会長は現象学的方法をとっており、本大会で韓国の研究者の発表でも現象学的方法を行っているものが印象に残った。こうした個人の思考や体験、社会文化的背景を視野に入れたとき、現象学的方法が有効であると思われる。ポスターセッションで、ある韓国の研究者に出会った。その人は女性の微妙な更年期に関わる症状について、丁寧にその体験を分析していた。言葉の壁があり、研究に深く入った討議が行えなかったが、熱心なそ

\* 日本赤十字広島看護大学 nakanobu@jrchn.ac.jp

の姿には感銘を受けるものがあり、私自身の研究に向かう姿勢に影響を受けた。国際学会に参加して、世界の人々との学術的な交流を深めることは、自己の視野を、日本人としての視野にとどめるのではなく、違う角度からさらに広げることにつながる。今後の自己の課題として、まずは言葉の壁をなくすべく、英語でコミュニケーションがとれることを目標としたい。

### ワークショップへの参加

本大会で行われたワークショップは、学会発表の前後の日を使って、丸一日かけて交流するというものであった。今回は「フォーカス・グループ・インタビュー (Focus Group Interview)」、[「エスノグラフィー (Ethnography)」、[「現象学 (Phenomenology)』という3つに分かれてのワークショップであった。私は「エスノグラフィー」、[「現象学」に参加した。どちらも多くの参加者があり、熱心に討議が交わされた。現象学のワークショップは、Max van Manen 氏 (カナダ アルバータ大学教育学部中等教育学科教授) によるものであった。ワークショップは、座席に座っている隣の人、前後の人と握手を交わし、挨拶をするということから始まった。握手をすることで、つい先ほどまで、「見知らぬ人」であったのが、「知っている人」に意味が変容する。このことで、隣にいた人が韓国赤十字の大学教員であったことが分かり、そこからまた隣の人との交流へと広がった。このワークショップの目的は、現象学的な視点 (perspective) と今日性のあるアプローチへの理解を深めることであった。講演を行いつつ、前述のような身体を使って理解するという方法もとられた。Max van Manen 氏自身、会場の人と握手をしたり、コミュニケーションをとったりと、大変フレンドリーで魅力的な人であった。研究という学術的な活動を通して、人の輪が広がる、そのことがすなわち研究の幅を広げることになるのだということを、身をもって体験した。また、Max van Manen 氏が開いているホームページ (URL=phenomenologyonline.com) も、画面で示しながら紹介された。それぞれの国に帰っても、アクセスすれば、現象学に関する研究について調べることができる。国際的な広がりを感じた。日本では、現象学的方法をとった研究は、医学中央雑誌で「現象学」をキーワードにして検索しても、原著論文は18件とまだまだ少ない。今回のワークショップへの参加をきっかけに、現象学的方法の理解を深め、活用していきたい。

### 韓国文化に触れて

今回、初めての国際学術集会への参加であり、韓国も初めて訪れた地である。自分の足で韓国を歩き、自分の目で見て、身体で感じた韓国は、これまで自分が持っていたイメージを変えるものであった。私がこれまで学校で学んできた韓国、メディアから得た情報とは、どこか違っていった。韓国の人々は大変親切で、街で道に迷って困っていたとき、地下鉄の切符売り場で困っていたとき、必ず誰かが声をかけて下さった。言葉は通じなくても、心で通じるものがあった。同じ東洋の地であるためか、英語圏の国を訪れたときとは違う雰囲気を感じた。現象学では、自己の持つ偏見、固定観念をひとまず置いておいて、現象そのものを見るという姿勢、すなわち「かっこ入れする (bracketing)」という姿勢がまず大切といわれる。C.Oiler (2000) が、この姿勢は質的研究を行うためには欠かさないものだと述べている。今回韓国を訪れ、自分が持っている韓国に対するイメージをひとまず置いて、純粋に自分の内なる目で見るとき、これまで見えていなかった韓国の姿が見えてきた。もっと韓国という国、韓国の人々を知るために、再びこの地を訪れたいという思いに至った。その意味でも、今回国際学術集会に参加したことの意義を感じた。

### おわりに

今回の国際学術集会への参加は、発表はしなかったが、多くの人々との触れ合いがあった。言葉の壁があり、研究についてのより深い討議が行えなかったことは残念であった。コミュニケーションを図るという意味での語学を修得することの必要性を今回とても実感した。また、質的研究にも様々な方法がある。私に関心を持っているのは現象学的方法であるが、エスノグラフィー、フォーカス・グループ・インタビューなど、研究目的によって、その方法を選択していくことが必要である。そのために、一つの方法のみではなく、いろいろな方法が活用できるように、研究方法の理解を深めていきたい。

国際学術集会への参加という貴重な体験の機会を与えてくださった本大学に感謝します。

### 文 献

Carolyn Oiler Boyd (2000). Phenomenology : the

method. In Patricia L.Munhall, Carolyn Oiler Boyd.  
editors, Nursing Research A Qualitative Perspective  
2nd rev. ed (pp.99-132). Toronto, Jones and Bartlett  
Publishers, Inc. and National League for Nursing.